

(4) 国際理解を目指した言語教育の構想 —高校生に向けた中国語授業での実践を通して—

チーム名 : Global Citizenship

清川美空, LIANG YUTONG, ZHANG YAOFANG, CHEN KEXIN

近年、グローバル化が進み、国家間のつながりはますます緊密になってきている。国際社会の平和維持には国家間の有効な関係を構築する必要がある。国際理解教育はそのような要請をふまえて展開されているが、現在の多くの国際理解教育は各国の紹介にとどまっていることが多い。その多くは文化体験に焦点を当てており、実際の国家間の摩擦や対立をふまえた深い考察にいたっていない。本研究では、以上のような国際理解教育の課題に応えるために、平和をテーマとした国際理解教育を高等学校の現場で実践した。その際に、外国語教育と関連付けることで、言語習得と国際理解の両方を促す教育プログラムを提案した。

Keywords : 国際理解教育, 平和教育, 外国語教育, 中国語教育

1. プロジェクトの背景と目的

近年、日本では社会のグローバル化に伴い、外国人児童生徒の数が増加している。また、教育現場では、国際理解の促進を目指した教育が今まで以上に推進されている。国際理解を目指した教育は、教科はもちろん教科を越えた領域でも行われている。例えば、学習指導要領では、総合的な学習の時間、社会科、外国語科、道徳科において「国際理解」を内容として取り扱うことが示されている。

しかし、国際理解を目指した教育については、これまで幾つかの課題が指摘されている。例えば、「英語活動を実施することがすなわち国際理解であるという考え方が広がっていたり、国際理解に関する活動が単なる体験や交流に終わってしまうなど、以前に比べ内容的に薄まっている、矮小化されているとの声もあるという指摘がある」という考えも示されている¹⁾。つまり、「外国語に触れること＝国際理解」と考えられているということである。同様に文化体験や交流体験中心の学習を国際理解を目指した教育として位置づけている実践も多い。国際理解の活動主義的な捉え方が、日本の教育現場に広まっているということは否定できないのである。

同じように、馬淵仁は、「3F アプローチ」と呼ばれる、異なる文化の食べ物(Food)、衣服(Fashion)、祭り(Festival)を学ぶことに焦点があてられ、社会の中の力関係やそこから生じる問題については見過ごされる傾向にあると指摘している²⁾。これは、文部科学省の指摘と同様に、国際理解が、外国の食べ物、

衣服、祭りに関する表面的な文化理解に留まっており、文化や習慣が異なる国や社会の間に生じる衝突や紛争、差別などについては焦点が当てられていない。

国際理解教育は、1970年代に、ユネスコの「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」³⁾の採択を踏まえて、日本でも実践が推奨されるようになった。そして、ユネスコはその勧告において国際理解教育で扱われるべき課題として、平和、人権、開発、環境、人種差別、難民といった地球規模の課題を提示した。

以上を踏まえて、本研究では外国語科における国際理解教育の内容や方法を明らかにすることを目指すことにした。特に、単なる文化紹介や体験活動、交流活動、外国語でのコミュニケーションに留まるのではなく、ユネスコの国際理解教育が本来目指している方向性である地球規模の課題を取り上げた国際理解教育に近付くためには、どのように国際理解を外国語教育と関連付けるべきかを考察する。

2. 実践活動

国際理解教育の内容を外国語科に取れ入れるため、今回は岡山市内のある高等学校（以下、A高校と表記）において、中国語を勉強している日本の高校生16名を主な対象として、実践活動を二度行った。実践の中で、平和に対するイメージについてのアンケート調査を行なった。また、中国の公立の高等学校

においても同様のアンケート調査を行い、両者の平和に対するイメージの比較を行った。日中の高校生への平和に対する認識の比較調査も、本研究では行うこととした。

2.1 事前準備

2023年8月、グループメンバーによるミーティングの後、A高校の協力を得るため、A高校の校長と連絡を取った。第1回の打ち合わせを通して、A高校の国際交流の理念や方法を理解した。さらに、A高校が日中国際交流活動を実施しようとしていることも把握した。第1回の打合せ後にグループで研究の内容を検討し、A高校での日中交流活動に参加し研究を行うことを決定し、そのことを伝えるため10月にA高校に連絡した。

A高校の校長の紹介により、中国語授業担当の教員に連絡をとった。11月、中国語担当の教員を訪問し、研究の目的や方法について説明を行なった。我々の方針を理解していただいたうえで、11月にA高校の交流活動に参加する許可を得た。

2.2 第一回交流活動

第一回交流活動の目的は、A高校の中国語を勉強している日本の高校生に自分たちのことを紹介し、相手のことを理解することであった。

まず、岡山大学の大学院生が自己紹介をした。自己紹介では、自分の出身地や興味等を紹介した。中国人留学生の3人の自己紹介は、日本語と中国語の両方で行った。

そして、A高校の生徒が4グループに分かれ、中国語で自分の興味等を紹介した。自己紹介の後に、中国の留学生と交流した。その後、A高校の生徒に、12月19日のワークショップを紹介した。

第一回の交流活動から、日本の高校生は中国の若者がどのようなアプリを使っているかということや、中国特有の食べ物に関心を持っていることが明らかになった。



(活動写真1)



(活動写真2)

2.3 第二回交流活動

第二回の交流活動は、「へいわってどんなこと？」をテーマとしたものであった。この活動では、平和をテーマとした絵本を使って、平和についての互いのイメージを示したうえで交流を行ったり、平和学の成果としての積極的平和や消極的平和といった理論を説明したりした。

以下が、交流活動計画である。

1. 時間：12月19日午後1時45分～3時
2. 対象：A高校の中国語を勉強している高校生
3. 場所：A高校
4. 内容：『へいわってどんなこと？』（浜田けい子作・絵、2011年）⁴⁾という絵本を読んで、平和についての議論を行う。そのうえで、アンケート調査を行なった（このアンケート調査は、中国の高校生に対しても行っている。内容は両方とも同じ）。

交流活動終了後、余った時間に自由な交流を行なった。A高校の高校生は、「中国の手話」「中国の若者の恋愛観」「中国人の顔と日本人の顔を比較する」「中国人の平和観念」等の話題について質問し、それに答え話し合う中で、日本と中国の間の様々な共通点も見つかった。

活動が終わった後、ワークシートを回収した。

3. データ分析

3.1 ワークショップの分析について

今回の研究の目的は、日本の高等学校の第二外国語の授業において、生徒の第二外国語の学習と地球規模の問題の学習を関連付け、外国語学習を通じた国際理解教育のあり方について考察することであった。そのため、今回の交流活動では、生徒が中国語と日本語の両方で書かれた『へいわってどんなこ

と?』の絵本を読み、「平和」についての理解を深め、「平和」というものはただの戦争のない状態＝消極的平和を指すだけではなく、「貧困のない状態」「自由に意見が言える状態」という積極的な平和もあるということに気付くことを目指した。効果の検証は、授業前（図1の質問項目4）と授業後（図1の質問項目6）に、ワークシートを使って「平和」



(活動写真3)



(活動写真4)

に対するイメージを聞き、比較するという方法で行った。

3.2 検証方法

アンケート調査を行なった中国の高校生は1クラス63名、一方、日本の高校生は中国語を選んだクラスの16名であった。日本の高校では、2回、交流活動を行なった。第一回の交流活動では互いに自己紹介をした。第二回の交流活動では、「へいわってどんなこと?」について、絵本を読み意見交流を行なった。日本の高校生は交流活動の中で、平和について考え、ワークシートの問いに答えながら自分の平和についての考えを表現していった。これらの生徒は、第二外国語として中国語を学んでいるが、そのレベルは決して高くはなく、簡単な単語を読むことができる程度であった。そのため、日本語、中国語、韓国語という3つの言語で書かれている『へいわってどんなこと?』という絵本を選んだ。生徒に絵本の内容を理解させるために、本の読み聞かせは

中国語と日本語で行った。交流活動で配布したワークシートの使用言語は、日本語であった。質問項目は下記のとおりである。中国の高校生に調査した項目は、そのうちの2, 3, 4だけであった。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1.自分の趣味を中国語で共有してみよう 2.年齢 3.性別 4.平和と聞いて何を思い浮かべますか? 5.絵本の文章の中で印象に残った部分はどこですか 6.授業を通じて何か感想がありますか(平和に対するイメージは変化しましたか) |
|--|

図1 質問項目

3.3 検証結果

質問に対して、生徒は「我喜欢…」(私の好きなものは…)とか、「我的爱好是…」(私の趣味は…)というように、これまで学んだ中国語を使って答えた。日本と中国の高校生に対して、共通に尋ねたのは質問2, 3, 4であった。アンケートに答えた中国の高校生の人数は、63名であった。そのうち、16歳の生徒は22名、17歳の生徒は23名、18歳の生徒は18名であった。アンケートに答えた日本の高校生のうち、17歳が6名、18歳が9名であった。回答がなかった者が、1名いた。質問4に対して、日本の生徒の43%、中国の生徒の38%が戦争のない世界と答えていた。ワークシートの質問5に対して、38%の日本の生徒が生命の価値に言及しており、「いのちはひとりにひとつ たったひとつのおもたいいのち」という絵本の中の言葉をあげていた。質問6では、88%の日本の生徒が消極的平和(戦争や紛争がない状態)と積極的平和(差別や貧困などの構造的な暴力がない状態)の違いを認識できていた。また、94%の日本の生徒は平和に対する認識に変化があったと答えており、以前に持っていた平和に対する認識と新しく学んだ知識をつなげることで、新しい自分の考えを作っていた。

3.4 考察

本研究の目的は、外国語学習に国際理解教育をどのように取り入れていくかということであった。これまでの外国語学習における国際理解教育は、外国語でのコミュニケーション活動や外国の文化理解に留まっているという先行研究の指摘があった。

本研究では、文化理解やコミュニケーション活動を越えて、ユネスコが提唱した国際理解教育において本来目指されている国際理解学習の形、すなわち、

地球規模の課題についての学習を外国語学習の内容として取り入れることに挑戦した。実践では、地球規模の課題として「平和」をテーマとして取りあげて、中国語と日本語で絵本を読む活動を行なった。

交流活動のはじめに「平和とは何か」と尋ねた時には、「戦争がない状態」と答え、圧倒的に平和と聞いて「消極的平和」をイメージする生徒が多かった。この点は、日本と中国双方の高校生に共通していた。その後、絵本を読む活動を通して、生徒の平和に対する理解が深まり、平和に対するイメージを「積極的平和」へと変容させることができた。

4. まとめと今後の課題

本研究では「平和」をテーマに、外国語教育における国際理解教育のあり方を探った。PBL では、2 回の交流活動を実施した。1 回目は A 高校の生徒との事項紹介を含む簡単なコミュニケーション活動であった。高校生にとっては、中国語の学習の成果を実践に応用する機会となった。2 回目は「平和」というテーマについて考えさせ、議論をし、国際理解を促進することを目指した授業であった。両活動において、生徒は取り上げた問題について積極的に議論し、考えることができた。そのため、国際理解が深まったと考えられる。

その一方で、活動を通して明らかになった課題もある。PBL の活動を始めた当初の構想では、ワークショップの目的として、国際理解を促進するために中国と日本の学生が直接交流することを考えていた。しかし、海外渡航が不可能であるということが判明したため、実現できなかった。そこで、計画は、中国語を勉強している日本の高校生に対しての交流活動のみとなった。日本の生徒とは、絵本を読んで平和問題について話し合ったりすることができた。しかし、中国人の高校生に対してはアンケート調査をするにとどまり、日本人の高校生が平和について考えたような活動をさせることはできなかった。

また、この活動の対象者は A 高校の中国語クラスの生徒 16 名であった。今後、他の言語を学習する生徒に対する調査を行う必要があるかもしれない。そして、この交流活動では、アンケートの分析を通して、生徒が平和に対する考えを深めていることが明らかになった。しかし、語学教育と同時に国際理解教育を進めるために、両者をどのように連携させ、その学習をどのように展開させるべきか、時間がどれくらいかかるかということについては明確な回答を示すことができなかった。これは、今後の課題である。

また、本研究は、外国語教育の中で国際理解教育を推進すること目的としていたが、成果の検証については生徒の平和に対する考え方を確認するのみで、外国語を学んだ成果については検証ができていなかった。交流活動を通して身に付けた言語知識（単語や文法）についても、その定着度を調査する必要があるだろう。

謝辞

本研究を進めるにあたりご協力していただきました、岡山市内の A 高等学校の校長先生、同じく中国語担当の先生、ワークショップに参加して下さった A 高校の中国語を勉強している高校生の皆さん、アンケートに協力して下さった四川省各公立高校、ご指導賜りました桑原敏典先生に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2005) 『初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～』。
- 2) 馬淵仁 (2013) 「第 2 章 多文化教育における政策的課題と葛藤—アメリカ合衆国における調査が示唆するもの」松尾知明編『多文化教育をデザインする —移民時代のモデルの構築』勁草書房。
- 3) ユネスコ (1974) 「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告 (仮約)」1974 年 11 月 19 日 第 18 回ユネスコ総会採択。
- 4) 浜田けい子 (2011) 『へいわってどんなこと?』童心社。
- 5) 日本国際理解教育学会編 (2021) 『国際理解教育を問い直す 現代的課題への 15 のアプローチ』明石書店。